

諏訪内・グアルネリ・パルティータ

藤原道夫

諏訪内晶子がリリースした CD、バッハ作曲「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ」(DECCA、2021)、をつい先だって入手した。手持ちのオーディオで聴いてみると、こよなく美しいヴァイオリンの音色が響いてきた。使用楽器はグアルネリ・デル・ジェス「チャールズ・リード」とある。あれ、諏訪内はストラディヴァリウス「ドルフィン」(伝説的なヴァオリニスト、ヤッシャ・ハイフェッツが使用した)を弾いていたのでは？

諏訪内の使用楽器を調べてみた。当初グアダニーニを使っていたが、1990年にストラディヴァリウスに出会い、すっかり魅せられてしまう。その様子を「この楽器のもつ音楽の表現力は、当時の私の表現能力をはるかに超えていた」と語っている。彼女はこれを使用し、同年18歳でチャイコフスキー国際コンクール・ヴァイオリン部門を制覇した。2000年に日本音楽財団から1714年製の「ドルフィン」が貸与され、これを携えてヨーロッパを中心に演奏活動を行ってきた。20年の貸与期間が終了す頃、アメリカのある財団から1732製「チャールズ・リード」の貸与を受ける。その時「前の楽器はキラキラと張り詰めていて、少し神経質な音だった。今は芳醇な人間らしい音が出せる」と言っている。

「ドルフィン」による諏訪内の実演は3回ほど聴いた。いずれも協奏曲だった。上手いには違いないが、特に印象づけられた点はない。その頃は庄司紗矢香が生み出す極められたしなやかな音色に魅せられ、機会あるごとに聴きに行っていた。使用楽器はストラディヴァリウス「ヨアヒム→レカミエ」。また W. レーピンがグアルネリ・デル・ジェスから繰り出すピロードの艶を感じさせる音色が耳に残った。そして、楽器はどれであれ弾き手が生み出す音色が自分の感性に合うことが肝心だ、と思うに至った。

諏訪内は上記 CD でバッハ作曲パルティータ(全3曲)が内包する音楽性を高いレベルで表現している。テンポの取り方が巧みで、高音は綺麗に伸び、低音はふくよかに響く。使用楽器が替わったせいか、弾き手の進化か、おそらく両方がからんでいるのだろう。CDの音を一概に比較できないが、同じ曲の演奏で V. ムローヴァや G. クレーメルに優っていると思う。できれば諏訪内の今の楽器による実演を聴いてみたいものだ。

